

野間宏全集

第五卷

野間宏全集

第五卷

筑摩書房

野間宏全集 第五卷

一九六九年十二月十日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一一七六五一（代表）
郵便番号一〇一―一九一
振替東京四一二三 CS 71405

本文印刷 暁印刷株式会社
製本 山晃製本株式会社

目次

さいころの空

第一章	骰子	3
第二章	二つの顔	23
第三章	人絹世界	60
第四章	祝盃	86
第五章	軍師船原老人	116
第六章	三村証券三村商事	149
第七章	平手景子	175
第八章	クラブ「希望」	203
第九章	軍師猪沢復吉	224

第十章	富貴亭	247
第十一章	作戦	274
第十二章	軍師三村留二郎	301
第十三章	買戻し	323
第十四章	陰と陽	350
第十五章	渡橋	377
第十六章	黄金と夢	403
第十七章	背後	430
第十八章	死の鳥	457
第十九章	綱子	484
第二十章	勝利と敗北	507
第二十一章	続勝利と敗北	538

第二十二章 続々 勝利と敗北

注 釈

『さいころの空』創作ノートから

兜 町

『さいころの空』の時代的背景

コスミックな世界

解 説

久保田正文

篠田一士

小久保実

568

598

601

608

610

618

623

さいころの空

第一章 骰子

一

一時少し前、大垣元男は兜町の証券取引所の前に出、鐵橋を渡った。朝から曇りつづきの空の下で何時になく今日は雨雲にまといつかれるのではないかという思いに見舞われたが、彼は取引所の前で一挙にそれをふり払った。すでに彼は自分の心を動かないところに置いてあった。商品取引所のある蠣殻町を前にして心を動かせるようでは、陣地を敵に開け渡したのと変えるところはないのだ。大垣は先月から持ち続けて来た方針の上に立って、今日もそれを向うに伸ばすだけでよいと考えていた。

すでに骰子は投げられたのである。一度定めた方針を変えることは自分の肉に爆薬を埋めて内から爆破させるのと同じことだ。彼は橋の手前で立止り、後につたっている証券取引所の建物を振返った。それはギリシャ古典式建築の円形七階の大きな表玄関を持ち、後に長く尾を引くように低い本館をそなえているコンクリートの建物だった。彼はその全体を眼におさめた。取引所は兜町の中央に長身の身体を伏せ、長い頭だけを灰色の空のなかに高くもたげて、

町全体をだきかかえるようにして建っている。

大垣は取引所の表玄関から茅場町の辺りまで両側にずつとつづく証券会社のビルディングの下に、真白のワイシャツがひるがえって動いているのを見た。十二時五十分の立会の再開を前にして活潑な動きを見せはじめたこの兜町は、彼のものである。彼が以前机を置いていた向本証券は、この通りの右手の裏側にあったが、十一時三十分の前場の立会が終わると、彼は場立や場電をつれて食事はこの通りまで出てきたのである。すると夏期でなければ、茶と紺の、立会場に制定された上衣がこの通りにみちあふれていた。

二月以来活気を失ったままの兜町の動くことのない空気は依然として大垣の頭の上にあった。それは先刻彼が茅場町で車を止めて様子を見ようと歩いてきた時、彼の身体にまといついた空気だった。それは彼の顔に当たった。それから彼はこの兜町のどんよりとした空気をはらいのけて、兜町の住人たちが向う河岸と呼ぶ蠣殻町に橋を越えて出かけて行くのだ。

大垣は日に焼けた腕の先にくいこんでいる時計を見た。黒に近いえんじの大きな二本の針は上の方で間をちぢめようとして十二時五十分をさしている。針は彼の日に焼けた肌の上に時を打ちこんだが、彼は十二時五十分の立会再開のベルがそのなかに鳴るのを聞いた。大垣は水かさの少な

くたった左右の水面を眼界におさめて、結局汗をふきださせることになるのかもかわらず、一氣に橋を渡り切った。昨日の強い風に吹きつけられて、人造大理石の幅の広い手すりが真白になっているのを彼は眼に残しただけだった。

大垣のうちに兜町の住人が橋を越えて商品取引に遠征に出かける気持がわき立っていた。彼の視界はいま灰色の雲がきたようにひろがった。彼はそのひろがった眼の前の空氣中に証券取引所の奥に拡がる六百坪ほどの広さをもつ立会場を描き出した。採光のために造られたガラス張りの天井の下の広場には、すでに立会が再開されている筈だった。十三の馬蹄型^{ばていけい}ポストと両側の壁^{かべ}ぎわにならんだ電話の列のまわりに多くの取引仲買人^{とりかひ}たち、才取^{さいと}会員、場立、場電が動いている。両側の電話にかじりついている場電の送る合図をうけて、ポストのまわりに立った場立は肩の高さに両手をあげ、指を折り曲げ、売りつづける。不意に取引の成立をつげる激しい撃柝^{げきたつ}のひびきが辺りをうつ。

しかしいかに激しい撃柝のひびきが鳴りわたっても、響きばかりいたずらに高くて、もはや人々をまねきよせる力を持つてはいなかった。今年の五月八日の金利の公定歩合引上げによって、大幅に落ちた株価はさらに下げつづけ、回復の見透しを見せなかった。……大垣は勢いをゆるめずそのまますすんだ。彼はそこを真直ぐに出て三叉路^{さんさろ}になっ

た交又点の方から人形町の方に出ようとして、すぐ右手の弁当屋のすだれをくぐって一人の目立つ服装をした男が出て来るのを見て立止った。しかし薄い空色のピカピカ光る上衣をつけた男は彼の方を見なかった。男はいまの時間では大垣と同じく人形町の方に向って歩いて行くべき人間だったが、道を右の方にとらず真直ぐに突切ろうとする。

呼びとめてひとつ顔をみてやろうか？ しかし大垣には自分の勝負のもっとも身近な最大の敵手呼びとめる気が起らなかった。買いつづけている相手がすでに相当の傷手を負っていることは明らかで、相手がどんな顔をして自分の前に現われるかそれを考えると彼の心も足も動かなかった。午前の前場で一六〇円を割る底値^{そこね}に近いところまで下げているにかかわらず、一時二十分から再開される人絹糸相場の後場^{ごば}一節にたいする不安が彼の内に動いて来たのである。午後の後場の一節に午前の前場の終節と全く逆転した形勢を見せることはこれまで彼のしばしば見てきたところだった。それ故午後の後場の一節を見とどけるまでは、その日の姿の全体を見定めることは出来ないのである。

大垣はそのまま相手を見送った。彼より二つ下の若年にかかわらず、この男が昨年独立して出している商品取引仲買店は、この道を真直ぐにとって人形町の方へ出る途中、

銀杏神社の近くを左にはいったところにある。男が現在も
 っとも主力をそそいでいるといわれている商品、人絹糸を
 取扱う繊維取引所もまた同一の方向にあるのである。しか
 し男はその方へはただの一べつも与えることなく、道を横
 切って歩いた。

二

卵色の幅広のズボンをつけ、卵色の靴をはいた男の足は
 軽く動いていて、その軽やかな足は男の背後にある父親の
 資金の力を感じとらせる。……その足は男の体をみるみる
 横道にはこんで行く。その方向にあるものといえは、男の
 第二力に向けている小豆を取扱う穀物取引所だけである。
 しかし人絹糸を買いつづけてきてもたらした損害を男が小
 豆で埋めようと作戦変えをしたなどとは考えられなかった。
 すでに男の損害はかなりの額に上っている筈だし、それも
 考えられないことはないが、そう考えてしまうのは余りに
 も自分だけに有利な解釈だと大垣には考えられた。

しかし男は横の通りにはいってずんずん行くかと思えて、
 急に立止まるとくると身体を廻して引返して来た。不意
 を襲われ大垣は身構えなければならなかった。一瞬の間を
 おいて、大垣と男の間はひっくりかえっていた。男は道の
 中央に出て来て、鄭重に身体をまげておいて、つづいて頭

を下げるいつもの二段がまえのお辞儀をした。

「やはり大垣さんだね。どうもそうじゃないかと思っただ。
 如何です？ 今日、玉御みずから御出馬のようでご
 ざいませうが。」男の声は身体に似合わずなよなよとしてい
 て、しばらくこちらの顔の辺りに漂っていて離れないよう
 に思える。大垣は同じように鄭重なお辞儀を返して口を開
 いたが、彼の答えは十分準備されていたとはいえなかった。
 「なんだ。岩城さん、さっさと向うへ行っちゃまうだろう。
 どうも買出動にしては方角がいいじゃないかしらと考え込
 みましたよ。いいえ、ね、別に出て来ることもなかったよ
 うなもんですが、この間からこれからひとつ蠟穀町の方へ
 出てみるとおっしゃる方が、四、五人も見えてぜひ面倒を
 みてくれないかというような話なんで、ひとのお世話も出
 来る時にやっておかなければいけないと殊勝に考えて出て
 きたんですよ。」

「いいえ、その御心配はいりませんからね。……ここまで
 買いますんできたものをど、でんしてなんてことは、考え
 ちゃいませんから。そうですよ……大垣さんとしちゃ、も
 っともっと心からひとの面倒をみておあげにならなくちゃ、
 いけませんでしょう。このところ相当ひとを泣かせてき
 ておいでなんだから。」

「泣かせてきた？」

「泣かせたでわるければ殺したとでも言い直しますか。」男はさらに互いの身体がつくほどに身体を近づけた。彼は自分のみつけた殺すという言葉に自分で満足してゆっくり顔を左右に動かしていた。

大垣は相手の陣形が再び強化されたのを知られたのである。たしかに言う通りここまで買い進んできたものを一六〇円を割ったからといって、でんして売るということは岩城としては考えられないことだろう。

「いや、……人を殺す気は全くないのだが、ついに死骸の山をきずいたというようなことはまだ望めませんね。」

「死骸の山というようなことは、こちらでもお断りいたしますよ。結局のところ、そのなかにこのわたしもはいることでしょう。いやですよ。」男はこれまでの鄭重さを自分の足で踏みにじるように、大きな気味の悪い声をあげて笑いだした。彼は固い肉付のよい小さい右手で口をおさえた。

大垣も笑ったが彼は男の短い髪が乱れているのを見た。しかし円味を帯びた育ちのよいふくらとしたその顔はすくにも髪の乱れを忘れさせる。大垣は男の顔が形式的な儀礼とたちまち自分からそれを破る無作法の間を自由に往き来する顔であるのをいまままた確かめた。その育ちのよさこそ大垣の憎しみをさそうものの一つだった。

薄い髪の毛はつき出た広い額から鋭さを奪っていたし、大きい鼻は造作の割に形がしまっていて、可愛い感じを造り出していた。太い眉毛の下に眼はまるく小さい象の眼を思わせて、顔全体が一瞬大垣にとまどった思いをさせるので、大垣の憎しみは薄れようとして一層強められる。

大垣は先刻「蟻殻町」に出て行きたいという人が、四人訪ねてきて「世話をたのまれたので、仲買店に紹介しようと考えて、今日は出て来た」と岩城に言ったが、それは嘘だった。世話を頼みにきた人は実際四、五人いたことはいのだが、彼は今日その人たちの用件を持ってきたのではなかった。彼は心を動かしたくなかったので、いまは相手とはやく別れたいものだと考えていたが、彼の足は動かなかった。この男のふくらした顔のうしろに隠しているものを、一挙に見抜かなければという思いが彼の身体をひつとらえていた。彼は再び今日出てきたのは他人の世話用だったのだということを、落着いて煙草の包みをポケットから出し、封を切っている相手に示そうとした。彼は言った。「この頃は、誰もが兜町から足を伸ばして蟻殻町へと出たがるんでね。でもいまから出たんじゃおそいっていうんだけれど、なかなかそうですかとは言いませんのでね。」

「とにかく兜町よりは動いてるんですから当然のことでしょう。これからはどうしても兜町と向う河岸とこの兩岸

を見渡しては、いなくちゃならんでしょう。わたしはいまじゃはつきりそう考えていますね。二十七年の兜町のようなことはとてもしばらく望めんとすれば、兩岸を見ながらすむってこともやらなくちゃ、どうにもならんでしょう。」

「望めんといいところで、内心ではみなそれだけを考えてるんでしょう。だからいましばらく待とうというところで、待ってるんで、兩岸外交というのはやはりあぶないもんですよ。」

「なんだか、今日は言うことが全然逆になっちゃいましたね……。別に僕は店を蠣殻町に出したから、店の手前で言ってるんじゃないんですよ。そういう結論が出たから店を出したんで、まあ、そういうことです。」

低く空にたれていた雲が西の方で二つに裂けて、烈しい夏の光が二人の若い顔に降りつけた。大垣は、相手の日に焼けて女の皮膚のように赤くなった、色の白い顔がゴム製の人形のように微笑^{ほほえ}んでいるのを見た。彼は光にうたれて眼を細めたが、彼が眼を細めると顔の長さが急にのびたかのように間のぬけたものになり、日に焼けて黒くなった顔がようやく人のよさを表に現わした。二人は突然輝き出た光の下で互いの馬鹿げた顔を見合わせた。次の瞬間二人は互いに相手を無視してかかる若氣を一挙に全身に表わしていた。

大垣は別に相手が店を出したからと言って、それを羨^{うらや}む心は持つてはいなかったが、店を出すことによって作戦に完全に煙幕をはることでできるようになった相手は警戒しなければならなかった。彼は相手がいま言ったことなどはもちろん信じてはいなかった。

「岩城さん、今日は小豆でしたか？」彼は相手に別れようとして挨拶^{あいさつ}代りに言った。

「ええ、小豆を人絹糸とは逆に売りで行こうと考えましてね……。少し昨日辺りから動きはじめたようですから。」

「それはいいことを、ききました。わたしはやはり今まで通り人絹糸一本槍で行くことにしますよ。」

「その人絹糸の方も、これからは、いままでのように簡単には行かせませんよ。これまでではたしかに、大垣さんのものでしたが……。昼のラジオでも言っていました、今日の天気予報は夕刻から小雨ということでしたよ。」

「小雨？ こまったな？ 今夜ふられるとすると……。」

「どちらへ、お出かけ？ 全く羨ましいですね……。松浪町辺りでしょうね。」

「そのラジオは聞きもらしましたが、どういう模様になろうと、行く手ははつきりきまつてるんで、わたしはこのまま行きますからね。」

「そりゃあ、そうですね、途中で大変になる手はない

んですからね。大垣さんにこんなことは申上げるまでもないでしょうが。」

大垣は小豆を人絹糸とは逆に売ろうという考えを全く簡単に言つてのけた岩城の顔を見た。しかし彼はそこに何の変化もとらえることは出来なかつた。岩城がこれまで小豆を売つて来ていることは事実だったが（そして相場は逆に値上りをつづけているのだ）、大垣の考えでは売るか買いかを決定するにはどちらの材料もそろつてはいず、はやすぎるのである。それに相手は人絹糸の方でも押し返そうというわけである。或いはすでに調査網を十分もつた相手は、小豆について売材料をつかんでいて、こちらがおくれたのかも知れない。すると彼の方にせまってくるのは皮膚をつき破つて自分の内にはいつてくるかのように思える相手の圧力である。しかし彼は自分の優位を奪われることはなかつた。彼は人絹糸の売り方にまわつて、今日まで大勢に乗つてきている。今日の相場の大引[★]も相場は下げている。それに今日まで買い方の大手である豊高^{トモタカ}紡績の豊高社長がこれまで買いつづけて来た玉[★]を投げるのではないかと新聞が報道している。

岩城の少し反[★]つた唇の間から勢いよく出て来る煙草の煙を避けておいて、大垣は豊高紡の話を出したが、彼の期待は外された。相手はこの大きな打撃を平然とうけた。

「豊高紡の玉（人絹糸）が売りに出るということはおききでしょう。」

「どちらの方の話でしょう。『日経』（日本経済）の記事は読みましたよ。投げ[★]せまる豊高玉というんでしたでしょう。誰がとつたのか解らないが、日経にはやはり腕ききがいまずね。とてもはやい材料でした。ほんとうによくやりますよ。」

「じゃあ、その前に知つてられたんですね。」

「ええ、少し前にはいつておりましたがね。わたしの方の解釈とは少しちがいますよ。……新聞はたしかによく材料をとつている。問題はこの材料の裏をかえしてどう見るかでしょう、そうでしょうな。」

「もちろんでしょう……。」

「豊高玉が投げとなれば、そりゃ、大変なことですからね……。わたくしどもなど、もちろん、ついに姿、形も見えず、つていうことになりますよ……。豊高玉のうしろには、[★]辺見商事の調査部長の安井さんが動いているといひますから……。でもこう太陽が出てきちゃ、あつくつて立話も出来ません……。」

岩城商事の岩城洋一は再び鄭重に身体をまげておいて、つづいて頭をさげる二段がまえのお辞儀をして、いま引返してきた道の方にはいつて行つた。彼は「すぐまん前を、

ひとが歩いてるのに、知らん顔するなんてことはなさらないで、呼びとめて下さいよ。」と言ひ残した。

三

大垣は蠟燭町の商品取引仲買三村商事の、入口を大きく開け放っている表事務所の中を素通りして奥にはいつて行った。彼は奥の事務室にとびこみ冷たいタオルをもらって顔をぬぐったが、それは役に立たなかった。彼は洗面所にはいつて着ているものを取り、ようやく氣持を取返した。それから彼はすぐさま大金庫を置いた窓のところにある大机の前に腰をおろして今日の相場の報告をうけた。

支店長の三村は机の上の扇風機を向けた。風が袖の短いシャツの上へふきつけてくると、次第に彼のうちに商品取引所の後場の空氣が伝わってくるようだった。彼は風をさけて煙草に火をつけ、いま途中で岩城商事の岩城に会ったことを話そうとしたが、やめにした。いつものあわてやすい自分を制する心が広い肘掛椅子に身体をおいていると動いてきたのである。

もちろん彼は自分の前に坐っている、この店の統轄者を信賴してはいないのではなかった。支店長の三村は、兄にあたる三村証券、三村商事の社長を兼ねている三村とは反対に自分一人では絶対に大胆な仕掛けの出来ないような弱点

をもっていたが、その自分の考えと意志を出さない支店長の消極性こそ大垣の求めるものだった。彼はつやのいい大型の顔をした支店長と意見を交わしながら、立会を待つてつかれることがなかった。彼が鎧橋を越えてこの店に出入りしはじめたのは二年前のことだったが、その時三村は、彼の使用出来るテーブルと椅子を置き、女事務員たちは彼の洋服掛け、湯呑茶碗をそなえた。

三村は昨日大磯の海岸で日に焼けた大垣の顔色に驚いて見せておいて、改めて机の上のレポートを覗きながら、今日の統落の人絹糸の模様を説明した。「もう堀本が帰ってくると思いますが、帰ってきたら、おきき頂いて。」彼は言った。堀本というのはこの店の外務員で大垣の担当の男だった。三村も自分のところで扱う大垣の玉に多く負っているのもので、その身体に似て平らかな顔には、自然笑いが上っていた。

「N・S・B（日本短波放送）できいているんだが、やはり変りないようだね、底値に近いだらうね。」

「底値でしような。売りがずい分出て来たようでございますね。」

「マバラ（小口）売りだろう。……商社も売りに出ているようだが。」

「左様です。この間少したて直す氣配をみせていたので様

子を見ていたところでしたが、しかしこうなれば売って出るんでしょね。」

「豊高の玉の模様がどうも変だと考えていたんだが、やはり投げと出てきたようだね……。」

「いや、今日などはまだ投げとは出ておりませんが……大分ちがっておりますね。……買ひも少し出ていますですよ。」

「買ひが出ている？ どちらでしょう……？」

「もう、少しすれば解りますよ。本社の調査部に電話して見ましょう。」

大垣はアルバイトで使っている吉戸という蜻蛉とんぼのように身軽に動く女事務員が運んで来た麦茶を一気に飲んだ。

「外からはいってきて扇風機に当たると、じつに涼しいところだなと思うんだが、十分もするともうここも外と同じことだね……。」

「こちらですと、少しは涼しいんですよ。……この裏から風がはいって来ますから……。こちらへ、お椅子をはこびましょか。」

「とにかくこの子は外交官ですよ。この子は調査部の方からつれてきたんですが、秋には表の方に出てもらいますから、その時には大垣さんはもっぱら表の方で休んで頂きましょうか。」

「僕を表の方へ追い出すつもりなんだね。」

「いえ、いえ、そんなら、こちらへ坐って頂いてもよろしゅうございますよ。この大金庫の前の机ですがね。うちの大將がいつもあなたには感服すると繰返して言いますからね。三村は手にもった御中元用の団扇うちわで自分の机をたたいておいて、左手で肌についたシャツをはなして風を入れた。」「ああ、また、僕を汗にしたね。吉戸さん、どうしてくれるね。汗に出ない麦茶のお代りくれないかね。」三村の方には答えないで、大垣は後の吉戸の方を振返った。不意にメーカーたちが、投げる豊高玉を引受けて、肩代りするのではないかという考えが、彼の内にひらめいた。彼は振返ってすぐ前に立っていた吉戸の少しそっているが、しっかりと鼻筋を見た。広い額は前におろした髪にかくされて見えなかった。

「まあ、せっかく、くんであげたのに、じゃあー、松浪町の冷房のある、おきれいな方のたくさんいらつしやるところあたりで、お代りされるのよ。」吉戸は部屋のなかの女事務員たちを笑わせておいて、全く知らぬ顔をしてコップも運ばず、統計表をひろげた自分のデスクへ行ってしまった。表の事務所との間の壁ぎわの会計の佐賀老人だけは笑わなかった。

「全く外交官だよ。そのものずばりでしたからね。」三村

は血管の見える平らな眼を改めて開くというように開いて、大垣の方につきつめた。

「大將に感服されるのは、感激のものでまあ、さしつかえないようなものですが、そのためについには切腹させられるということになるのは御免ですね。……この間はお話ししたように三村さんに御招待をうけて、大変な御馳走になりましたが、ね。その代り深遠な相場哲学を拜聴させられましたよ。」大垣が相手の眼をまともに受けて避けなかったので、相手の方が、脂あぶらの浮いたすでに生えぎわの薄くなつた額を上に向けた。……全く簡単なことなのだ。買占めに失敗して、持っている玉を投げようというとき、メーカーが前にすすみ出てくることは、これまでにもしばしばあることであり、メーカーとしては当然商品の値下りをふせがねば大きな損失を自分が蒙こうむることになる。

……この考えは大垣が昨日「日本経済」の豊高紡の記事を読んだとき、当然考えていた考えなのだが、いま再び彼の内から烈しい噴出するような光をとまって、頭のなかに現われてくると、彼はその異常な光に自分の売り作戦の全体が照し出されて、見る見るその貧弱な正体をあらわすように思わせられた。彼は三村支店長が「まあ、社長が自分の三十五年の激戦をくぐって、自分であみあげてきたもので、肌合はだあひのあう方となると、とことんまで、きかせたく

なるんですね。」と言っているのを、聞き流した。

「豊高の玉は今日はまだ投げとは出ていないとおききしたんだが。」大垣は椅子に体をあずけて天井に向けていた顔を身体ごと、真直ぐに立てた。

「ええ、今日はまだ、投げは出ておりませんですよ。」三村の横に机をならべている色の白い株式係の安井が横から声をあげた……。「前場の出来高*は昨日とそれほど出入りがありませんので。」彼は吉戸を呼んで、表事務所から、今日の前場の計をもつてこさせて、大垣の方に出した。「値段と出来高、両方はいっていますから。小豆は下の段でして。」

「今日はまだ投げは出ていない？」大垣は紙切れに書かれた細いペン字の数字に眼を通した。

「いいえ、今日はまだ出ていないと申しただけで。」三村は言った。

「投げることに決めているね。」

「決めているでしょう。一六〇円割はそれとにらみ合つてでてきたものでしょう。」

「増宮商事の外交にも来る前に電話で一寸あたつてみたんだが、大体そうなるだろうということでしたがね。今朝、広木工業のある重役が来ての話でも、豊高玉の投げは大体きまつたということでしたよ。」